



## Karlsruhe (西独), Sheffield (英) で暮してみても

正法地延光\*

海外レポートをひとつ。と、旧師から依頼されましたものの、何を書いてよいのやら、特に考えてもまとまりませんので、独、英に暮してみまして感じたことどもを漫然と書き連ねてみることにします。記述は極めて主観的なものとなり、誤解、独断、偏見に満ちたものとなりますことと存じますが御容赦願います。貴重な誌面を浪費するのみに終らぬことを念じるのみです。

さて私は、阪大工学部では原子力工学科佐野教授の指導下で、直接的には桂正弘先生のお世話になりつつ、3元系窒化物についての研究を進め、1977年3月に工学博士の学位をいただいた者です。その年の9月より西独カールスルーエ原子力研究所 (Karlsruhe Kernforschungszentrum) の IMF (Institut für Material- und Festkörperforschung) の F. Thümmeler 教授のところへ客員研究員としてまいり、H. Holleck 博士の下で3元系窒化物の熱力学的安定性の評価のための計算に従事しました。そこには1979年末までおり、1980年よりここ英国シェフィールド (Sheffield) 大学の金属学教室 (Department of Metallurgy) に移り、D. H. Warrington, H. A. Davies, H. Jones 博士らの Rapid Solidification グループに加わり、chill-block meltspinning という手法により Ni-基超合金を急冷 ( $\sim 10^5$  K/S) し金属リボンとしたものについて、組織観察等の研究を行っております。

そこで、こうした研究所、大学での研究経験から感じたことどもから書き始めてみることに

します。まず、人間管理の仕方につきまして気がつきましたことを取りあげましょう。独の原研では、ピラミッド型と言える組織をとっているように見受けられました。すなわち、各人が自分のボス (Chef) は誰であるかを明確に意識していたと思います。ですから技官 (Techniker) に仕事を申しつけましても、「それでボスはどう言っているのか」等と聞くこともあり、少々うるさく感じることもあるのですが、それでも、彼らにてっとり早く仕事を片付けてもらおうと思えばボスに話を付けておけば良いので、ある意味では、非常にやり易い訳です。ところが、これが英の大学となりますと、個人の独立性が極めて尊重されていると申しますか、各人、自分の主人は自分自身ということになりまして、誰かに対する帰属意識が全く欠落しているように感じられます。教授, Reader, Senior Lecturer, Lecturer というのがこちらの大学での教職員ですが、研究室制ではありませんので、全員が独立した研究者ということになっております。それに加えて、技官 (Technician) がいますのですが、彼らも独立した存在でありまして、例えば、Aは真空関係、Bは電気炉関係といった具合になっておる訳です。こうした中での例外は、私共のような研究助手 (Research Assistant) と呼ばれる、2~3年契約で、特定の研究計画を持った教職員のために働いている人間でしょう。

英国の大学教官も、やたらに講義、会議等の雑用が多いようでして、研究計画は実際には助手あるいは博士課程学生によって行われています。独の人間管理の仕方がむしろ日本に近いように思いました。日、独が近代産業社会として成功しており、英がどちらかというとうまくいっていないことの根源を、このような人間管理

\* 正法地延光 (Nobumitsu SHOHOJI), University of Sheffield, Department of Metallurgy Post-Doctoral Research Assistant 工学博士, 原子力工学, 英国シェフィールド大学, 金属学科, 助手

の考え方の差異に求めるのは、いささか行き過ぎということになるのでしょうか。企業はもろ論大学とは随分違っているとは思いますが、英の労組 (Trade Union) の活動等をみておりますと、いかにも、この人間管理の考え方に問題があるのではないかと考えてしまうのです。

独から英に移りました時に驚かされたことのひとつに、英の大学に於ける外人学生の異常な多さ (特に理科系大学院) がありました。独では外人留学生の数はせいぜい十数%というところだと聞きましたが、シェーフィールド大の理科系の学部で外人学生の割合が50%を下るところは無いようです。私のおります金属学科では大学院生のうち英国人が約10%しかおりません。鉄鋼産業は、何せ国の基幹産業となるものですから発展途上国から続々と人が送られてくる訳です。外人学生の学費は年3,000ポンド (日本円で約130万円程度) です。大学にとっていい収入源であるとは思いますが、仮に日本の大学がこんな姿になってしまったら見るにしのびないだろうとは思いますが。金属学科の外人のほとんどが中南米から来ています。これまで先進工業国に原材料として安く買われてしまっていた鉱石を自国で精錬し、製品にまでしたいという国家の期待を担っているのだらうと思えます。そんなことは英側も百も承知のことですから、講義でも情報の出し惜しみがあるような話も耳にしましたし、外人学生の方は、金を払った分だけは知識を仕入れて、という意識があるようです。

日本で、よく、外人留学生がむしろ反日感情を持って帰国するという話を聞き、残念には思いますが、それは日本だけの問題では無いと思えます。英国の外人留学生の多くは自国と英国の歴史的因縁のせいか、はじめから反英感情を持っており、それをさらに増幅して帰国していくようです。それでも、3~4年英国にとどまって勉学を続けるのは、学ぶべきものがあるということでしょう。日本での外人留学生の問題にしましても、できる限り力を貸して、それで相手方がどのような感情を持つかは、相手方にゆだねる、という位の気持ちでやっていかねば仕方がないのではと思ってしまう。日

本の場合、そこまで外人留学生の気持ちの問題を考えていることが評価されてもいいのではないかと思います。日本の中では、日本の技術は借り物で、研究体制にしても問題が多いというような議論をするむきもあるようですが、こちら側からみておりますと、なかなかそんなものではありません。世界有数の科学技術大国になってしまうのです。そうなりますと、当然のことなのですが、日本留学への興味も極めて高いように思われます。日本語が英語のような共通語として通用していないため抵抗を感じるところがあるように感じられます。

独のアレクサンダー・フンボルト (Alexander von Humboldt) 奨学金のような大々的な恒久的なプログラムが設けられたら良いのではないかと思います。フンボルト財団は世界各国から400人程度募集すると聞きましたが、将来国の要人となりそうな優秀な人材をうまく集め至れり尽くせりの待遇を与えているようです。現実には、発展途上国の政策が極めて少数の指導者層によって左右されるらしいことをみましても、独のフンボルト奨学金のような制度を日本にも設け、各国からの優秀な人材を重点的に呼び寄せ、強い人間関係を作っておくことは、日本のような資源小国が将来ともに存立していく上で極めて重要なのではないのでしょうか。

日本語が、外人にとって、難しいらしいと感じられている原因として、日本語を外国語として教える研究が十分になされていないことが挙げられるのではないかと思います。実はここシェーフィールド大には日本研究センターというのがありまして、政治、経済、言語学等を専攻する学生のうち、特に日本語を選択したい者について3年のコースで日本語教育を行っています。例年30人程度集まるようです。ケンブリッジ大、オックスフォード大、等にも日本語を学ぶ機関はあるようですが、そこでは伝統的に文学等が主として研究されているようで当大学のように実用現代日本語をやっている所は、英国では極めてユニークなようです。ここの教育計画は非常によくできているのではないかと思います。それは1年生半ばの学生でも、読み書きがいく分でき、辞書もいく分使えるように

なっているのを目にしたからです。このセンターの主な教職員が英国人であり、日本人は主として会話を補助的に教えるようになってきているところをみても日本側が日本語を外国語として教える方法を体系的に研究していないのではないかと疑問を持たざるを得ないのです。独はゲーテ協会 (Goethe Institut) を世界に配し、英でも、英語を外人に教えるための教師を養成しているようです。日本が鎖国でもしており、世界の片隅にとどまっていた時代なら別ですが、現実の日本は文句なしに科学技術時代の先進国として存在しているのですから、日本語を外国語として教える体系の確立を急ぎ、ひとりでも多くの、本当の意味での、日本の理解者を得るようにしておくのが将来のために良いのではないかとと思われるのです。

大学周辺のことばかり書いてまいりましたので、このあたりで日常生活の中で感じましたことども、たとえば鉄道を利用しまして感じました独、英の違いでも例にとってみましょうか。独の鉄道は、日本と似ておりまして、正確で清潔です。例えば、イタリアのミラノからコペンハーゲンまでといった長距離列車があるのですが、こういった列車には、Karlsruhe-Bonn, Frankfurt-Koln といったドイツ国内の主要都市間を利用する乗客も当然多いわけで、これによる混雑緩和のために、時として Entlastungszug と称する臨時列車を、実に数分前に配したり、心にくいばかりの配慮がなされております。

英は、かなり違います。ロンドンからシェフィールドへは St. Pancros という駅から乗るのですが、以下に記すのはいずれも当地での本当のできごとです。ひとつは、列車に乗り込み席についていた時のことです。ほとんど満席だったのですが、突然車掌がやって来まして、みんな降りてくれ、とくる訳です。何を突然、そんな無茶な、と当然抗議をする者が出ます。車掌が申しますに、この車輛は、サッカー応援の団体客のために予約してあるから空けておくように、今駅長の方から連絡があったところです。だから、自分の責任ではないと付け加えることも忘れません。こういう時、英国人が比較のおとなしく従うのは全く不思議です。

もうひとつの、信じ難いような出来事は、切符売り場での光景です。それまで、2つほどだった古い窓口が、新装の5つの窓口を持つ売場になったので、おっ、少しはキレイになったな、と思ったものの、中の係員はひとりで、他の4つの窓口はしまったまま、例によって長い列ができている訳です。発車時刻の迫っている者もありイライラしている者も出てくる訳です。と、2~3人のカバンを肩からかけた駅員が登場しまして、列の横にまいてきて、こう叫ぶのでした。「特にお急ぎの方は、こちらで切符をお求め下さい。」まるで笑い話のようですが、この光景は、英国では決して例外的なものではなく、あちらこちらでぶつかるのです。

ちなみに George Mikes というハンガリー生れの作家が“How to be an Alien” (Penguin books) という本に英国人がいかに他のヨーロッパの人間と異なった人間であるかを短いエッセーの形でまとめているので、興味がおありの方はお読みになると面白いと思います (近刊の“How to be Decadent”は前記の版の続編となっておりますし、この著者には、日本の風俗を面白く紹介した“The Land of the Rising Yen”もあります、蛇足ながら)。

団体旅行でのドイツ人の騒がしきは日本人顔負けです。バス旅行でも、運転手に、オーイ暖房のキキが悪いぞ、といった文句をつけてみたり、ビールの廻し飲みがはじまったり大変です。そこへいくと、イギリス人はまことにおとなしく、ある時暖房のキキが極めて悪い時があったのですが、乗客は運転手には訴えず、寒いわね、そうですネ、といった風に近所どおしさやきあっていたのには恐れいりました。

紙面もそろそろ尽きてまいりました。何ともまとまりのつかぬ記事となりまして申し訳ありません。ヨーロッパの独、英という2つの国にしばらく暮してみましただけでも、ヨーロッパの政治・人種問題が非常に複雑で、日本で考えておりました“ヨーロッパ”という統一的な漠然とした概念がどこにも存在せず、むしろ、多様性が各々の存在を主張しながら共存していることを認識せざるを得ない想いをいたしております。